

【新小学2年生以上の入学試験について】

Q1 新小学2年生以上の入学試験の内容や所要時間を教えてください。

新小学2年生以上は筆記試験と個別面接を行い、所要時間は最長65分となっています。ただし、実際に試験に要する時間は学年や児童生徒により異なります。

筆記試験（約50分）

新小学2年生～新中学1年生：①読解テスト（漢字・言語についての設問も含む）

②漢字テスト（漢字の読み・書き）

③ミニ作文

※新小学2年生は、ひらがな・カタカタのテストもあります。

新中学2年生・新中学3年生：①漢字や言語に関するテスト ②ミニ作文

個別面接（約10分＋個別面接室への往復5分）

Q2 筆記試験は、どのような内容、レベルですか。

[資料『入学試験の範囲・内容と求められる力』](#)のとおり、国語の教科書に基づいたレベルです。

Q3 筆記試験の準備として、どのような取組みをしたら良いでしょうか。

入学希望の前学年の国語教科書（小2希望であれば小1の教科書）を熟読しておくことをお勧めします。

教科書を読むときは音読が効果的です。黙読だと、漢字や言葉の区切れを正しく読めているかどうか分かりません。音読させるとその発音やイントネーションから、子どもが言葉のまとまりや意味がわかっているかが大体わかるので、音読を聞いてあげて、子どもにたくさん質問を投げかけて、本当に知っているか、理解しているかを確認してください。

日本の教科書は四季折々の事象を背景として作られています。特に幼少期から海外生活をしている子どもは、教科書に書かれた情景や描写が十分に理解できない場合が多々あります。大人が思っている以上に、子どもには感覚的に捉えられないことや思い違いをしていることがあると考え、見たことがないものは、保護者が実物を見せてあげる、画像を見せてあげる等の、支援が不可欠です。

Q4 漢字テストへの準備として、どのような取組みをしたら良いでしょうか。

新小学2年生以上の漢字テストでは、本校ホームページに掲載の「文字学習ワークシート」（〇年で学習した漢字）を活用してしっかりと学習しておいてください。このワークシートには、入学試験の漢字テストで出題される漢字の大部分が含まれています。これを正しく読んだり書いたりできるよう、繰り返し学習しておくことをお勧めします。

Q5 新小学2年生の筆記試験で、ひらがな・カタカタのテストの準備も必要ですか。

新小学2年生希望者は、ひらがな50音表とカタカナ50音表、練習用紙、小さい文字やのぼす音、は・を・への入ったひらがなの表記を練習するワークシート、カタカナのことばを書く練習をするワークシートもしっかり活用して学習しておいてください。これは、小1の学習の大部分を文字学習が占めるためです。文字としてだけでなく、言葉や文章の中でも正しく表記できることが求められるので、しっかりと練習しておくことが大切です。

Q6 漢字テストの合格基準は何点くらいでしょうか。

新小学2年生入学希望者は読み書きともに100%、つまり小1の漢字80文字は全て正しく読み書きできることが望ましいです。

新小学3年生以上の入学希望者は、前学年で学習した漢字のワークシートの読みは100%、書きは80%以上の習得を目指してください。

Q7 子どもは漢字が苦手です。入学してから前学年の漢字を習得することはできないのですか。

本校では、授業日毎に新出漢字を学習するため、本校の限られた授業時間では既習漢字（入学希望の前学年までの漢字）を復習させたり定着させたりすることは困難です。既習漢字は、入学までにしっかり復習しておくことをお勧めします。

入学後も、漢字の復習や定着には、家庭学習が重要となることをご理解ください。

Q8 漢字の復習や定着のために、家庭ではどのように取り組めば良いでしょうか。

漢字は、「読める」から「書ける」と思っははいけませんし、『つい最近まで日本で学習していたから大丈夫』という油断も禁物です。日本から来て間もない子どもや日本人学校で学習してきた子どもでも、国際校・現地校で学習し始めると漢字に触れる時間がなくなるため急速に漢字を忘れてしまい、入学試験で漢字が書けずに不合格になった例が少なからずあります。

漢字を定着させるためには、繰り返し漢字練習を行うだけでなく、日記を書いたり家族や親せきに手紙を書いたりするなど、漢字の意味を理解して活用する機会を作ることが大切です。

Q9 新小学2年生以上の筆記試験の「ミニ作文」というのはどのようなものですか。

絵を見て、ミニ作文を書きます。学齢に応じた語彙や表現を用いて、絵に書かれた様子や状況を正しく文章に書けることが大切です。加えて、その絵を見て感じたことや考えたこと、想像したことが書けると更に良いでしょう。

Q10 新小学2年生以上の個別面接は、どこで、どのように行われますか。

順次、筆記試験会場から児童生徒を別室に誘導して行います。児童生徒1名に対し、面接官1～2名で対応し、所要時間は10分程度です。

Q11 個別面接はどのような内容、レベルでしょうか。

個別面接では、まず教科書教材を音読してもらいます。すらすら読めることが求められますが、「すらすら」というのは読む速さの問題ではありません。既習漢字を正しく読むのは当然のことながら、言葉の意味や文の内容を理解した上で、言葉のまとまりに気をつけて、つまらずに、適切な速度で読めることが大切です。

次に、音読した教材の内容をどの程度理解しているか、言葉の意味を理解しているかを確認するために質問をしたり、動作化させたりします。

面接官から聞かれたことに対して、子どもの年齢に応じて適切に答えることが求められます。

声が小さい子どもは不利となる場合があります。はきはきと元気よく話せることが望ましいです。

また、面接官の質問を聞かずに一方的に話す児童生徒や、立ち歩きをする児童生徒については、本校での受入れが難しいと判断される場合があります。

Q12 その他、面接試験への準備として、どのような取組みをしたら良いでしょうか。**読み聞かせ**

国語の教科書ばかりだと飽きてくることもあるので、特に小学校低学年では、教科書以外にも多くの本を読み聞かせ、理解したことを自分の言葉で伝えさせるよう取り組むと良いです。

また、子どもが誰かに読み聞かせをする楽しさを覚えると、更に自分で本を読みたくなるということも期待できます。相手は妹や弟、お友達など、自分より年下の子どもたち相手でもいいし、兄や姉、お父さん・お母さんでも良いでしょう。文字を読む楽しさを覚えることが今後の学習につながる大切な経験となります。

日本のテレビ番組を見せてあげる

語彙力が向上し、日本語の文章の流れがわかるようになることが期待できます。読み聞かせと同様に、子どもに具体時な内容を問う質問をして、本当に知っているか、どのように理解しているかを確認したり、子どもの言葉でお話の内容を説明させたりというように取り組むと良いでしょう。

英語で学んだ語彙が日本語では何というのかを教える

国語の語彙は低学年では具体的なものの名前が中心で、学年が上がるほど抽象的な語彙が増えていきます。英語と日本語をつなぐのは保護者の役目にとらえ、就学前からしっかりと保護者が支援をしていると、入学後もそれが継続できるでしょう。同様に、幼児語もできるだけ正しい言葉に置き換えてあげると良いでしょう。

単語の羅列ではなく、できるだけ文で話す

親と子の会話は語彙や表現に限られ、主語や目的語を省き単語だけで会話が成立してしまうことが多く、生活言語能力は身についても学習言語能力は身につけません。入学試験の個別面接では、単語の羅列だと日本語力が十分でない判断される場合があり、できるだけ文で話すことが求められます。家庭でも学齢に応じた言葉を用いて「いつ・どこで・だれが・何を・どうする／どうなった」などの要素を含む文で話すように心がけましょう。また、できるだけ指示代名詞（あれ、これ、それ）の使用は避け、具体的に話すようにしてください。

家庭の中で日常的に日本語を使う

日本語を母語として学習していくためには、家庭での日本語環境を確保することが大切です。小学生になる直前までは特に母語の確立が最も重要とされており、1日の起きている時間の半分より長く母語以外の言語に触れ続けることは避けるべきだという説もあります。とにかく母語としての日本語を使用する時間をできるだけ長くとることが大切です。そうでないと、本校に入学しても国語の教科書を学習し続けることは難しいし、学年が上がるほど国語力の伸びに影響してきます。

子どもはメイン校では英語や中国語のみを使用していますので、帰宅後も日本語を解さないメイドさんに子どもを預けたままの場合、両親が日本人であれば勝手に日本語も育つと思うのは大きな間違いです。このような場合、日本人家庭の子どもであっても、日本語の発音や言い回し、助詞の使い方、形容詞や動詞の活用が不自然になる事例が多々あります。

親子の会話が英単語混じりにならないよう気をつける

海外生活が長くなるほど、保護者も子どもも無意識に英単語混じりの会話をしていることが多いです。外来語として日本語に定着している言葉は別として、外来語の発音についても、日本語の中で使用するときは英語的な発音ではなく、日本語として発音し、英語と外来語の使分けができることが望ましいです。この使い分けができないと、小学校低学年で学習するカタカナ表記にも影響がでできます。

日本語学習の必要性を保護者が伝えとともに、家庭での学習支援をしっかりと行う

言語の学習には「本人のやる気」が重要ですが、低学年の子どもにそれを要求することは難しいです。親子で楽しんで学習することで、幼いながらも子ども自身が必要性を感じ、学習継続の意欲となります。小学校中学年以上になると、日本語学習の必要性を感じられない子どもにとって補習校の学習は苦痛でしかありません。また、保護者の強い要望により本校に入学したものの、子どもは本校での学習に目的意識と意欲を見いだせず1年もたたないうちに退学するという例もあります。

自分の意思をはっきりと保護者に伝えられる子どもは良いですが、伝えられない子どもの場合はチック症や教室での問題行動となって現れることもあるので、保護者の方には、常に子どもがどのような状況であるかを客観的に判断する目を持ち、気を引き締めて家庭での支援に取り組んでほしいと思います。場合によっては、メイン校も含め子どもを取り巻く学習環境を見直すことも大切です。

英語であれ日本語であれ、言語習得には時間がかかり努力以外の近道はなく、特に海外における日本語学習では保護者の支援が不可欠です。『家庭は第二の教室、保護者は第二の担任』ということを常に念頭におき、支援することが大切です。